



令和3年8月4日

各報道機関 御中

宮崎大学企画総務部
総務広報課長

宮崎大学のトピックス（7月分）の配信について

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本学の教育・研究・社会貢献活動についてご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、本学は地域活性化の中核的役割を果たす大学として日々様々な活動を行っております。その活動の概要は、大学のウェブサイト上にトピックスとして掲載し、幅広く地域の皆様に見ていただけるようしているところです。

そのトピックスを月毎にまとめたものを報道機関の皆様にお配りし、大学の活動を知っていただくとともに、記事として取り上げていただき、より地域の皆様の目に届けたいと思っております。

つきましては、是非一読していただき、取材していただくようお願いいたします。取材にあたっての関係部署との調整・取り次ぎ等は総務広報課広報係にお申し付けください。

敬具

① 発信元

宮崎大学企画総務部総務広報課

TEL : 0985-58-7114 FAX : 0985-58-2886

宮崎大学最近のトピックス（令和3年7月分）

1. 世界銀行の坂元紀子氏のオンラインセミナーを開催
2. 田野フィールド公開講座「ミツバチの世界を知ろう」を実施
3. 地元で水揚げされた魚 815 種掲載「新・門川の魚大図鑑」が完成
4. オンライン合同記者会見を実施～ひきこもりと社会経済的要因の関連可能性を解明～
5. 宮崎大学：ワクチン予防接種を開始
6. 大学生が園児に伝統野菜「佐土原ナス」の苗植えを伝授
7. 附属図書館で国文祭・芸文祭みやざき2020「みやざき大歌会」を開催
8. 外国人材の活躍に関する意見交換会を開催
9. 元オリンピックランナー谷口浩美さんがランニング指導
10. 大学生と中学生の交流座談会を実施
11. 「学生寄生虫川柳」表彰式を開催
12. （株）尾鈴山蒸留所によるおにぎりプロジェクトを実施
～食を通じて医療従事者にエールを～

1. 世界銀行の坂元紀子氏のオンラインセミナーを開催

令和3年6月25日（金）、宮崎大学で世界銀行の坂元紀子氏によるオンラインセミナーが開催された。

本セミナーは、昨年度リニューアルした附属図書館に、在福岡米国領事館からの助成によって、「アメリカン・インフォメーション・デスク」を設置したことに伴い、アメリカの社会・文化に関連した情報を招へいたゲストから発信するセミナーとして定期的



的に開催しているものであり、第5回目の開催となった今回は、本学の教職員及び学生だけでなく、県立宮崎大宮高等学校と連携した「ひなたALネットワークプログラム」との協力もあり、多数の高校（8校）を含め約450名の参加があった。

講演は、高校生や大学生など、大部分がZoomを利用したオンライン形式での参加となり、坂元氏の活動地域であるアフリカのモロッコから8時間の時差の中、オンタイムで行われた。また、平衡して本学附属図書館内にあるitanomaにて感染対策を徹底し、少人数の参加者を募り実施された。

世界銀行で従事している「西アフリカ貿易円滑プロジェクト」についての説明とともに、どのようにして国際機関で活躍・キャリアを積んでいくかについて自身の体験に基づく講演があった。

また、講演終了後には、高校生及び大学生による活発な質疑が行われ、最後に坂元氏からは、「国際機関で活躍するためには、コミュニケーション力と専門性が重要です。高校生や大学生には学校生活を楽しみながら、今、興味を持っていることに集中して専門性を磨いてほしい。」とのアドバイスが送られた。

同アメリカン・インフォメーション・デスクでは、コロナ禍においても、オンラインセミナーや、留学生との交流により、海外留学に関心のある日本人学生の支援を行い、本学における積極的な国際交流の促進に取り組んでいくこととしている。

2. 田野フィールド公開講座「ミツバチの世界を知ろう」を実施

令和3年6月26日（土）、宮崎大学農学部田野フィールドにて、小学生親子向けの公開講座「ミツバチの世界を知ろう～ミツバチの一生とハチミツができるまで～」を実施し、親子12組が参加した。

本講座では、農学部田野フィールド内にてミツバチの巣箱を設置管理する養蜂家が講師となり、ミツバチの生態や人間がミツバチから受ける恩恵、ミツバチの生きる環境やミツバチ

を守るためにできること、養蜂家の仕事についての講義を行った。

教室にはガラス張りの観察箱が用意され、女王蜂の産卵の様子や雄蜂と働き蜂の違いなど、普段見られないミツバチの巣箱内の様子に、女王蜂を探したり、死骸を運ぶ働き蜂を見て質問したり、と親子ともに興味津々で観察した。



また屋外のデッキでは、巣箱の中に入れる

巣枠を一組1つずつ制作する仕事体験をし、金槌、釘や針金を使って蜜ろう巣礎を貼るまで親子で協力しながら作業した。その他、会場には蜜ろうクレヨンで絵を描くコーナーや、絵本、蜜ろうラップや蜜ろうキャンドルなどの紹介展示のほか、ハチミツの採蜜時期による味や色の違いを比べるはちみつコーナーが用意された。

参加者からは、「ミツバチの観察が楽しかった、蜂のおうちづくりができて良かった」、「ミツバチの世界は複雑で興味深く、とても面白かった」「スプーンいっぱいのはちみつをミツバチに感謝して食べようと思った」などの感想が寄せられ、好評を博した。

今後も田野フィールドでは、森林や環境に関わる様々な講座を実施していく。

3. 地元で水揚げされた魚 815 種掲載「新・門川の魚大図鑑」が完成

宮崎大学では、2017年6月に門川町と包括連携協定を締結し、様々な連携事業を実施しており、この度、連携事業の一つとして実施してきたプロジェクトにより、大図鑑『新・門川の魚図鑑 ひむかの海の魚たち』が5年の歳月を経て完成した。

本図鑑は、「さかなのまち」として知られてきた門川町（湾）周辺の魚類多様性を学術的に証明し、門川町の魅力を発信することを目的

として製作されたものであり、門川町役場をはじめとする地域の方々の多大な協力を得ながら、農学部准教授の村瀬敦宣をはじめ延岡にある水産実験所において研究をしている宮崎大学生等が相当な時間をかけて地元で採れた魚一つ一つを撮影し、作成した地域に密着した図鑑となっている。

この図鑑の最大の特徴はその魚種の多さです。沿岸（水深約0m～40m）でとれた魚種644種、陸棚（水深約20m～110m）でとれた魚種186種、深海（水深約200m～363m）でとれた魚種88



種の合計 815 種が掲載されてる。

さらに、3 段階の水深で分けられたそれぞれの環境別に魚類を紹介していて、立体的に門川の海の多様さと、それぞれの環境に生息する魚種の違いを知ることができるようになっていて 357 ページにおよぶ大作となっている。

7 月 1 日より販売が開始されたほか、門川町のふるさと納税の返礼品としても採用され、同町へのふるさと納税 10,000 円につき一冊が返礼品として贈られることになっている。

4. オンライン合同記者会見を実施 ～ひきこもりと社会経済的要因の関連可能性を解明～

令和 3 年 7 月 2 日（金）、本学教育学部 境泉洋教授の研究成果オンライン記者会見を実施し、ひきこもりの増加と完全失業率の上昇が相関関係にあるとする調査結果を発表した。

境教授は、東京未来大学の野中俊介講師との共同研究において、KHJ 全国ひきこもり家族会連合会と連携して、2010 年から 2019 年にかけて実施した 10 年間の調査データから、年間の完全失業率、有効求人倍率、

平均世帯収入との関連を分析し、ひきこもりと社会経済的要因の関連可能性を解明した。

この研究結果は、ひきこもりなどの社会的孤立を予防するためには、完全失業率などの社会経済的要因にも焦点を当てる必要があることを示唆していて、論文としてもまとめられ、学術雑誌 Comprehensive Psychiatry に掲載された。

オンライン記者会見は、東京未来大学、KHJ 全国ひきこもり家族連合会と共同で実施し、教育学部の藤井学部長が冒頭挨拶を行い、戸ヶ崎副学部長（研究担当）が司会を務め、新聞各社だけでなく、厚生労働省や宮崎市役所の福祉従事者も参加し、コロナ禍で完全失業率が悪化している今こそ、ひきこもりの対策が強く求められるとの見解を共有した。

本学では、今後も積極的に大学の教育と研究の成果を発表し、広く地域社会に還元していくこととしており、コロナ禍における情報発信手段としてオンラインの活用も推進していく。



5. 宮崎大学：ワクチン予防接種を開始

宮崎大学では、新型コロナウイルスワクチンの集団接種（職域接種）を330記念交流会館コンベンションホール（木花キャンパス）において開始し、初日となった令和3年7月8日（木）は学生約330名、教職員約70名の合計400名が接種を受けた。

接種にあたっては、6月に大学内で学生向けの説明会を実施し、接種を希望



する学生と基礎疾患のある教職員を優先させて予約を受け付けたうえで、今回の接種開始となった。接種をした学生からは、「就職活動で移動する際に安心感がある」という声がある一方で、「副作用などが不安」との声があった。

接種後は、経過観察のために15分の間会場に待機することとなっており、看護師が巡回しながら接種を受けた学生・教職員を観察して安全確保に努めていた。

また、河野俊嗣宮崎県知事も接種会場の視察に訪れ、池ノ上学長および福満看護部長などが同行しながら、本学における職域接種の状況などを説明した。

今後、8月25日（水）までに、接種を希望する学生・教職員に対して2回目の接種を実施する予定としている。

6. 大学生が園児に伝統野菜「佐土原ナス」の苗植えを伝授

令和3年7月9日（金）、社会福祉法人木花福祉会木花こども園において、宮崎の食を学ぶ「佐土原ナス定植活動」を実施し、園児39名が参加した。

地域資源創成学部食品科学研究室（指導教員：山崎有美准教授）では、日頃から「食の機能」をキーワードにした教育研究活動を推進しており、この活動の一環として、食に対する心構えや栄養、伝統的な食文化について学ぶ総合的な教育である「食育」に取り組んでいる。



近年、農業の発展の影響を受け、不安定な形状・食べ方の情報不足・生産者の担い手不足・消費の低下等で地域から消えていく伝統作物も少なくない状況のなか、地域の宝である宮崎伝統野菜を持続可能な形で次世代へと継承するためには、伝統野菜の認知度向上は不可

欠で、子どもたちに佐土原なすを育て食べるという過程を通して「食材のありがたさ」や「食べる喜び」を楽しみながら知ってもらい、伝統野菜に興味関心を持ってもらう機会にしたいとの思いから、当該研究室学生が、宮崎県の食資源である佐土原ナスの定植・栽培活動を子どもたちと一緒にいった。

定植活動に参加した子どもたちは、佐土原ナスの花の色や水やりの仕方をしっかり覚えた様子で、「お友達と一緒に植えるのが楽しかった」「元気に育て、おいしく食べたい」等の感想が聞かれた。

今後も、地域資源創成学部食品科学研究室では、食育活動を推進し、生涯を通じて、食べる力を養う素地醸成を目指していくこととしている。

7. 宮崎大学附属図書館で国文祭・芸文祭みやざき2020「みやざき大歌会」を開催

令和3年7月10日、宮崎大学附属図書館では、今年度宮崎県が主催する国文祭・芸文祭みやざき2020の一環として、短歌を身近に感じてもらおうと「みやざき大歌会」と銘打ち、短歌に関するイベントを開催しました。

ゲストに、歌人・作家として活躍する 東直子氏、歌人・コピーライター（フリーペーパー「うたらば」の刊行）として活躍する 田中 ましろ氏を迎え、新型コロナウイルス



ウイルス感染拡大防止の観点から限られた人数とはなったが、会場では宮崎市の中・高・大学生が参加した。

第一部では、ゲストによるトークイベントが行われ、ゲストの自己紹介を兼ねた幼少時代の話や短歌に触れる切っ掛けとなった話など、短歌にまつわる熱いトークが交わされ、会場は大いに盛り上がった。また、トークイベントの様子はインターネットでライブ配信され、多くの方が視聴した。

第二部では、参加者が2つのグループに分かれて「音」をテーマにしたワークショップが行われ、事前に募集された21首の短歌について、それぞれがそれぞれの歌から感じた情景や思いを闊達に発表し、交流を深めた。

各グループに分かれたゲストからは、行間の叙情や言葉単体の意味だけではない、聞き手の想像によって異なり広がっていく感情や表現などが解説され、参加者は短歌の面白さに目を輝かせてた。

最後に、応募のあった21首の短歌の中からゲストによる「東賞」、「田中賞」が選考され、

記念品とともに、「是非、今後も短歌を詠み続けて頂きたい」との励ましの言葉が贈られた。宮崎大学附属図書館では、このようなイベントを積極的に受入れ、今後も様々な文化を発信していくこととしている。

8. 外国人材の活躍に関する意見交換会を開催

令和3年7月10日、宮崎大学は県内関係者による外国人材の活躍に関する意見交換会を開催した。

宮崎県では、各産業の労働力不足が深刻化する中、留学生を含む外国人材の円滑な受入や海外で培った経験を有する優秀な日本人学生など、多様な人材が活躍できる社会基盤の整備が求められている。

これらを背景に、本学では、本学が有するリソースを最大限に活用し、県内関係機関



との連携・協力の下、出口を見据えた本県独自の国際人材の育成・定着に向け「宮崎大学国際人材プロジェクト」を創設した。

キックオフとして開催した本意見交換会には、県内企業、自治体、本県で就労している外国人、本学学生及び大学関係者など42名（オンライン含む）の参加があった。

開催の挨拶では、村上副学長（国際連携センター長）から、大学は教育を通じて、社会に貢献できる人材を輩出することがミッションであることや、これまでの本学の強みを生かし、国際人材の育成・支援に取り組む本プロジェクトの概要や期待される成果等について紹介され、引き続きJICAから注目され、特に外国人材の定着が顕著な成果となっている「宮崎ーバングラデシュ・モデル」に関しては、事業の運営担当者である伊藤准教授から、事業の背景や特色ある取組、成果に繋がったヒントなど様々な視点からの紹介があった。

また、永山特別教授をファシリテーターに、外国人受入に積極的に取り組んでいる県内企業三社の代表とパネルディスカッションを行い、外国人受け入れの効果や今後に期待すること等についての現状が共有された。

さらに、参加者は6つのグループに分かれ、「理想的な外国人材の受入のあり方」をテーマに意見交換を実施し、終了後は各グループの意見を共有した。今回のパネルディスカッション、意見交換を通して「外国人材を雇用することにより企業全体の活性化に繋がった。」「多様性を尊重することが企業成長に繋がる。」「外国人のキャリアアップ、スキルアップも重要な観点。」等様々な意見があり、参加者は今後の課題についても理解を深めた。

本プロジェクトでは、県内企業の外国人受入の現状を把握するとともに、企業ニーズと外国

人の就労ニーズを理解し、それらのマッチングや課題解決によって、就労・労働環境の構築を図り、企業の積極的な国際人材の受入支援や生活環境及び日本語支援等へ取り組んでいくことを目指していく。

9. 元オリンピックランナー谷口浩美さんがランニング指導

宮崎大学では、全国的にも注目を集めるユニークな市民向けの公開講座「フルマラソンを走ろう♪」を実施しており、20歳代から70歳代までの25名が参加してる。

本講座は、1991年世界陸上男子フルマラソンにおいて金メダルを獲得した谷口浩美（現：宮崎大学教育・学生支援センター特別教授）が講師を務め、座学と実技を交えながら前期3回



シリーズで実施し、宮崎県内で最大級のマラソン大会である「青島太平洋マラソン」において、フルマラソン完走を目指す方を対象に実施するものである。

第1回目（6/26）は、水口麻子講師（安全衛生保健センター）から健康管理や暑い時期にランニングをするうえでの注意点やコロナ禍における感染症対策・救急救命方法などの説明があり、続いて、谷口特別教授から、フルマラソンを走るために知っておきたい基礎知識について説明があった。

その後、受講生はグラウンドに出て、1,000m～3,000mのインターバル走を行い、小雨が降るなかでも必死に走り汗を流していた。また、受講生は、谷口特別教授が持つ金メダル（1991年世界陸上男子フルマラソン）と、東京オリンピック聖火トーチと一緒に記念撮影を行い、士気を高めた。

第2回目（7/10）は、インターバル走（400m×8本）などを中心にしながら、ランニングフォームや自分が目指すゴールタイムに合わせたペースを意識した練習メニューとなった。

第3回目は8月28日に実施し、後期も10月から11月にかけて3回シリーズで実施する予定としており、受講生は12月12日に開催予定の青島太平洋マラソンに向けて調整を進めて行くこととしている。

宮崎大学では、東京オリンピック大会機運の醸成をはかるとともに、オリンピック後を見据えて『「スポーツを観戦する」から「スポーツをする」』という機運の醸成をはかり、地域の皆様の健康な身体づくりに寄与していくこととしている。（後期の募集開始は9月末頃を予定。）

10. 大学生と中学生の交流座談会を実施

令和3年7月13日(火)、本学4年生24名と宮崎市立清武中学校3年生123名による交流座談会を実施した。

本座談会は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、職業講話の機会等が失われる中学校の現状を受け、身近な大学生との交流を通じて将来を考えるきっかけにしようとして、地域資源創成学部(桑畑夏生講師)と宮崎市立清武中学校が連携し、企画したものである。



数名に分かれた中学生のグループのなかに大学生1名が入り、ニックネームでキャッチボールや共通点探しなどのグループワークを行いながら、まずはお互いを知るところからスタートした。緊張がほぐれたところで、大学生が人生曲線のワークシートを使って、大学生生活や自身の経験、そこから得られた学び・気づきを語った。生徒たちは、海外留学やビジネスプランコンテストへの挑戦、サークルやアルバイトでの体験談、失敗をどのように乗り越えてきたかなど、学生の多様な経験に真剣な表情で耳を傾け、積極的に質問を投げかけるなど興味津々の様子であった。学生との座談会の後は、残りの中学生生活で大事にしたいことや挑戦したいことをマイ・クレド(自分との約束事)として考えてもらい、代表して数名の生徒が発表を行った。

参加した生徒からは「残りの中学生生活で挑戦していきたいことが明確になった」「自分の悩みに対するアドバイスをもらい、前向きな気持ちになれた」といった感想が聞かれた。

今後も、地域資源創成学部桑畑研究室では、県内の中学・高校等連携したキャリア教育プログラムの開発に取り組んでいく。

11. 「学生寄生虫川柳」表彰式を開催

令和3年7月20日(火)、宮崎大学では「学生寄生虫川柳」の表彰式を医学部長室にて行った。

「学生寄生虫川柳」は、医学科感染症学講座寄生虫学分野の丸山治彦教授が、医学生に寄生虫に親しみを持ってもらおうと寄生虫に関する川柳を募集したものである。



その結果 112 句の応募があり、学外審査員 3 名を含む計 5 名の審査員による厳正な審査が行われ、大賞（グランプリ）1 句と金賞 4 句が選ばれた。

表彰式では、片岡寛章医学部長から「楽しく学ぶことは教育の原点。これを機に寄生虫の道を究める人が出てくることを願っています。」と学生たちへ励ましの言葉があり、大賞を受賞した医学科 3 年の新海眞知子さんからは、「まだまだ親に寄生虫（中？）の身ですが、今後も精進していきます。」と意気込みが語られた。

表彰式には感染症学講座の教員や学生も駆けつけ、和やかな雰囲気で行われた。

◆大賞（グランプリ）作品

旅帰り マラリアキャリア 来日し

（天国見るも 無事に生還）

12. （株）尾鈴山蒸留所によるおにぎりプロジェクトを実施

～食を通じて医療従事者にエールを～

令和 3 年 7 月 26 日（月）、新型コロナウイルスが流行する中、食を通して医療従事者にエールを送ろうと、株式会社尾鈴山蒸留所（宮崎県児湯郡木城町）から宮崎大学医学部附属病院で働く医療従事者に向けておにぎりがふるまわれた。

本企画は、有名フランス料理店



「NARISAWA」の成澤由浩オーナーシェフと高級レストラン「WAGYUMAFIA」の浜田寿人オーナーシェフが全国の酒蔵を訪問し、その土地のお米、食材、酒蔵の仕込み水を使ったおにぎりを作り、地域の医療従事者に届ける「おにぎりプロジェクト」の一環で行われたものである。今回提供されたおにぎりは、すべて宮崎県産の食材で作られており、具材にはウナギや尾鈴山で山林放飼にこだわって育てられたブランド鶏「黒岩土鶏」が使われ、これまでプロジェクトでふるまわれた中でも特に贅沢なおにぎりとなった。

両オーナーシェフから「長期にわたり新型コロナウイルスへの対応を続けている医療従事者の皆さんに心からの敬意と感謝の意を示したい。気持ちを込めてつくったおにぎりを召し上がってほしい。」との寄贈の趣旨説明があり、鮫島浩病院長から「温かい心遣いに大変感謝している。力のこもったおにぎりを食べて、引き続き業務に励んでいきたい。」と謝辞が述べられた。